

1. はじめに

自然災害・人為的災害ともに災害は多くの人々の命、生き残った人々の生きる術（生業）を奪います。

2011 年 3 月 11 日の災害は、地震と津波による自然災害と東京電力福島第一原子力発電所からの放射性物質の拡散によって、震災から 5 年目になろうとする今も、復興への道筋はみえていません。それにもかかわらず、政府の定める「復興集中期間」は間もなく終わろうとしています。

本講座では、被災地の人々の暮らしと自然環境の現状とともに、暮らしの再建には、豊かな自然を取り戻す長期的な視野が必要になること、逆に言えば、ひとたび環境が汚染されると、長期にわたり人々と自然の関係が失われていくことから、「ふるさとの喪失」や「人間の復興」の意味するところを考えてみたいと思います。

2. 人々との暮らしと自然

福島県は、北海道、岩手県に続いて面積が大きく、米や野菜・果樹の栽培が盛んです。震災以降、避難によって人口の減少が続いていましたが、2015 年度には出生率が震災以降初めて増加に転じました。しかし、とくに自然が豊かな中山間地域は人口減少が急速に進むことが予測され、さらに農林漁業などの一次産業の衰退が深刻な課題となっています。

原発事故の直後、野菜の出荷制限を課された農家の方が自殺する事件が起きましたし、検査体制が十分ではなく、政府が決めた食品に含まれる放射性物質の安全基準値を上回る農産物が市場に流通し、人々の不安や検査体制への不信感が高まりました。現在、米は全袋検査、野菜・果樹などはサンプリング調査が実施されています。また、県産の原木の全量検査の実施も今後予定されています。

風評被害の払拭が復興のためには欠かせないと言われます。しかし、本来は実害として被害を把握しなければならぬことまで、風評被害といわれることもあります。現在の安全基準値では安心を得られないと嘆く消費者もいます。重要なのは、被災地の農産物を食べて応援のような安易なフレーズで消費を促すのではなく、上記のような検査体制や結果を誠実に伝えることです。

農林業の復興に欠かせないのが、マイナーサブシステムです。マイナーサブシステムとは、本業の農林業と比べて経済的意味は少ないけれども、人々に生きがいや楽しさを与えるような生業のことをいいます。山菜やキノコの採集、ニホンミツバチの養蜂などです。まったくの非経済的活動ではなく、少しの小遣い稼ぎぐらいになることも生きがいとなる理由です。福島県はマイナーサブシステムが盛んなところでしたが、自然環境が汚染されたことで季節の楽しみが奪われました。仮設住宅では、食べることはできないけれども、香りだけでも嗅ぎたいと、強い香りのキノコを軒下にぶらさげておられるという話も聞きました。

さらに、年月がたつことで、「なんとなく大丈夫」という雰囲気が出てきています。昔から山菜やキノコを旬の時期に食べることが健康に良いと信じてきたお年寄りの中には、検査をせずにお孫さんに山菜を食べさせようとする人もいて、心配するお母さんが悩む状況が出てきています。山でとれるものの多くはいまも出荷制限されていたり、非常に高いセシウムが検出されたりしています。5 年を経たからといって、人々の苦悩は消えません。

全村避難をしている飯舘村は、ユニークな地域づくりをする自治体でした。阿武隈山地の高地にあった野菜や花きを栽培し、まずしく、つつましいながらも「豊かな」暮らしを実践していました。2017 年春の帰還をめぐる、農業や畜産業の再建が本当に可能なのか、若い人が帰還するのかなど、村民の思いは多様です。ここでも、鍵となるのは自然環境の回復です。

3. 3.11 後の子どもと遊び

放射性物質は五感で感じられず、広い範囲を汚染しました。問題は、汚染の広がりを示すマップが公表されたのが、3.11 から半年経てからということ。初期被ばくの状況がわからず県民健康（管理）調査が続いています。このような生活環境において、子どもの外遊びを制限する動きは、除染の進捗とともに随分緩和されました。屋内遊技場の整備が進んでいますが、管理された環境での室内遊びは、想像力や子供同士のコミュニケーションが必要な外遊びの代替にはなりません。

わたしが福島県生活協同組合や福島県ユニセフ協会と協働で実施している保養支援（通称：コヨット！）は、乳幼児を育てる家族を週末に温泉地にお連れし、外遊びの第一歩を経験していただく機会として多くの方に利用していただいています。ここ2年ほどは、子どもの遊び支援だけでなく、健康や食、飲料水の安全、子育てについて自由に話ができる交流会の開催に力をいれています。前向きな復興を妨げるからと、被ばくや不安について語りにくい雰囲気がうまれているからです。

4. おわりに

これほど大規模な原子力災害は日本では初めての経験です。被害の全体像はわかっていません。日本の負の遺産である数々の公害事件の被害は過小評価され、解決に時間がかかりました。真の復興には被害の把握と救済が欠かせません。今こそ、経済効率優先の社会を見直すこと、とりわけ現在、ほぼ忘れ去られている「人と自然のかかわり」の深さを見直す機会になればと考えています。

【参考文献】

- ・西崎伸子（2011）「生活者の視点で考える鳥獣の保護管理と地域づくり」松野光伸・境野健児編『小規模自治体の可能性を探る：福島県飯舘村における地域づくり』八朔社、175-191
- ・千葉悦子・松野光伸（2012）「飯舘村は負けない 土と人の未来のために」岩波新書
- ・塩谷 弘康・岩崎 由美子（2014）「食と農でつなぐ 福島から」岩波新書
- ・西崎伸子（2012）「『放射性物質・被ばくリスク問題』における保養の役割と課題：保養プロジェクトの立ち上げ経緯と2011年度の活動より」『行政社会学会論集』第25巻第1号、31-67
- ・西崎伸子(2013)「子どもたちの「復興」のために～コヨット！2年間の実践から」西村一郎著『3・11 福島の子どもといっしょに—協同の力で被災した親子に笑顔を』：146-149
- ・西崎伸子(2013)「福島の子ども保養プロジェクト週末保養参加者へのアンケート調査の集計結果と分析（第一報）」『行政社会論集』第25巻第3号：41-78
- ・西崎伸子（2013）「原発事故後の福島県の乳幼児家族を支える取り組み」『福島の進路』No.365：69-71
- ・西崎伸子（2013）「原子力災害の「見えない被害」と支援活動」清水修二・松岡尚敏・下平裕之（編）『東北発・災害復興学入門：巨大災害と向き合う、あなたへ』山形大学出版会：144-166
- ・西崎伸子（2014）「原子力災害から3年目をむかえて：災害直後の社会状況と抗い」『平和研究』第42号 61-79
- ・Yoshiyuki Kiyono, Akio Akama (2013) Radioactive cesium contamination of edible wild plants after the accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant (福島第一原子力発電所事故後の山菜の放射能汚染) 森林立地 55：113-118.
- ・除本理史・渡辺淑彦（2015）「原発災害はなぜ不均等な復興をもたらすのか：福島事故から「人間の復興」、地域再生へ」ミネルヴァ書房
- ・成元哲・松谷 満（2015）「終わらない被災の時間—原発事故が福島県中通りの親子に与える影響(ストレス)」石風社